
個性派ゲーム部活動記録

ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

個性派ゲーム部活動記録

【Nコード】

N3133BA

【作者名】

ハル

【あらすじ】

部活見学をしていると、生徒会長でありゲーム部部長の東条月夜に連れられ、無理矢理ゲーム部に入部させられてしまう。そして、そのゲーム部の部員には普通な人は一人もいない。これは、そんなゲーム部に入部してしまった一人の少年の物語。

入部

「あなたでいいわ。あと一人で、正式な部と認められるの。だから、ゲーム部に入ってください」

俺は部活見学で文化部棟を歩いていると、突然、黒髪黒目のかなりの美人に勧誘されていた。

部活に認められるには、大会に出るための最低人数揃える必要がある。

ゲーム部の場合は分らないが、そんなに多くはないだろう。

しかし、どうしてこうなった。

「あの、部活見学、じゃダメですか？」

相手は学年章の色で分かる。2年生だ。

「どうせ入ることになると思っけど、まあいいわ。付いてきて」

美人の後ろに付いて行ってる俺って、周りから見たら下心丸出しに見えるのだろうか。

まあ、いい。悪い気はしていないし。

「あつ、そうそう、私達の部室は入ったが最後。ボスを倒すまで出られないわよ」

「どこのダンジョンですか！」

いや、ゲーム部って名前だし、ステージ1つクリアするまで帰れないってことなのか。

「ふふっ、なかなかいいツツコミね。うちの部にはまだツツコミがないから頑張ってね」

何だか、すごく先が思いやられるんですけど。

「着いたわ。ここが我らがゲーム部よ」

徒歩1分ぐらいで着いた場所は、少し狭いぐらいの教室。

ガラガラガラ

「見学に来ました。一年三組の玖珂太陽です」

ドアを開けて早々に挨拶をするが、いたのは一人の少女。

「一年四組の南風凜よ。よろしく」

入学したばかりで、他クラスの人など知らないが、銀髪赤目に名前通り凜とした美しさがあることから、この人のことは知っていた。

でも、イメージではお嬢様なんかじかと思っていたのに、PSPから視線を外さない彼女を見ていると、イメージが崩れ去ってしまった。

「私は東条月夜よ。よろしくね童貞君」

うん。これってポケだよな？

それも名前を間違えたなをてレベルじゃない、完璧な嫌がらせだよな。

「黙ってないで、何か言っしてほしいわね」

「部長さんは愉快的な性格をしてるんですね」

俺なりに皮肉を込めて言ってみたが、部長さんはニコニコしている。

「それじゃあ、私のことは『部長さん』じゃなくて『月夜^{つきよ}』って呼んでほしいわ。あと、そっちの子はツン子ちゃんね」

「誰がツン子ですか！あたしは凜です」

ツッコミ…もう一人いるじゃん。

「はいはい。あつ童貞君、ゲーム部では下の名前があだ名しか禁止されてるから、よろしくね」

「月夜先輩分かりましたけど、俺まだ入るとは言ってないんですけど」

そう、まだ見学なのだ。

「あつ、それなら大丈夫よ。もう入部届は出してあるから」

そう言っつて、月夜先輩は、いつ書いたのか分からない入部届をポケットから取り出す。

誰のдарう。

なになに、……玖珂太陽……。

「って、何で俺の入部届があるんですか！」

「私を書いたからに決まってるじゃない」

「何で、俺の入部届を月夜先輩が書くんですか！」

「別にいいじゃない。もう受理されたんだし」

ん？受理された？

ここにあるなら、まだ大丈夫なはずじゃ。

「私はこれでも生徒会長よ。そして、入部届は生徒会が受け取るの。だから生徒会長の私は、入部届を合法的に作れるのよ」

全く合法的じゃない気がする。
って言うより職権乱用だろう。

「ってことで諦めなさい。玖珂太陽、もとい童貞君は今日から、我々ゲーム部に正式に入部しました」

「何で、言い直したんですか！？」

フルネームで名前を呼ばれた後に、悪口に言い直す必要はあったの
だろうか。

「一人いないけど、まあいいわ。ゲーム部の活動を始めます」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3133ba/>

個性派ゲーム部活動記録

2012年1月8日09時47分発行